The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

寓話「抜髪男事」の系譜
——仏教文献と世俗文献の交渉の更なる一例——

松村　恒

1．落語のマクラから

研究の出発点は次の驚きからであった．八代目桂文楽が「悋気の火の玉」のマクラに標題の笑話を語っている．「悋気の火の玉」を語る演者はこの師匠に限られないが，本話をマクラに振るのは八代目文楽だけである[1]．落語が様々な伝承に素材を求めて語り直していることは夙に知られるところであるが，この場合はマクラだけに特定の噺家が用いているので，その出所などについては明らかではない[2]．話の内容は，老若二人の妾をもつ白髪交じりの旦那が，年増からは黒髪を抜かれ，若い方からは白髪を抜かれて，とうとう禿になったというものである．イソップ系寓話に少し親しんだ者ならば，すぐに西洋所伝のパラレルを想起し，日本の伝統芸能の中に西洋の古い伝承が見られることに驚きの念を持つことになる．とはいえこれの直接の材源は取り敢えずは日本の中に探さねばならない．時間を逆順に遡っていって，類話を探ると，先ずは『伊曽保物語』下十八が挙げられる．

2．『伊曽保物語』下十八　男二女をもつ事[3]

切支丹文献から派生した国字本であるが，この文献は他の多くの仮名草子とされるものと一括して扱われるようになり，完全に国文学の歴史の中に位置を確保しているものであるが，伊曽保の名が示すように，外国渡来のものである．十六世紀に来日したポルトガルの宣教師達は西欧の様々な文物を将来したが，キリスト教とは必ずしも直接の関係をもたないイソップ系寓話集をも将来したことは特筆に値する．本話はローマ字日本語で記された天草本には含まれていないが，この事実は国字本がローマ字本を単に日本字に書き換えたものではないことを証する根拠のひとつになる．話の根幹は上に挙げた落語のマクラと同一である．幸いなことにキリスト教教義との関連が薄い国字本は切支丹禁令の後も生き残り，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

却って江戸時代には広く読まれた．少なくとも十一回は開版されているので，落語に影響を及ぼしたと想像することは可能である．しかしそれを直接証拠立てるものはない[4]．

3．『三国伝記』巻一第二十五　抜髪男事[5]

十五世紀前半になる説話集で，梵語坊・漢字郎・和阿弥が交互に三国の物語を語る趣向で構成される．梵語坊が語る印度起源のものとしての小話の内容は同一であるが，末尾に「此如ク心多キ者ハ今世後世共ニ叶ヌ事也．譬喩経・経律異相ニ見ヘタリ」とあるが，直線部分が締めの句であり，波線部分に出典が伝えられている点が重要である．版本を翻刻した池上洵一は「このような注記にもかかわらず，本話が『経律異相』に直接依拠したものとは考え難い」（頭注55）と述べる．その理由として「『異相』の話は本話の第三段の耕作の条を欠くほか，第二段で男が妻を訪れるのも小婦・大婦の順で本話とは逆になっているなど相違点が多く」（補注43）ということである．原文に段落の数字が与えられているわけではないが，池上の想定する段落分けは〈第一段〉導入部〈第二段〉抜髪〈第三段〉耕作〈第四段〉犬と二寺，ということであろう．このように版本『三国伝記』は抜髪の小話を単独で伝えるのではなく，他の物語を連結させている．その点で池上は出典に関して疑問を抱いたのである．

しかし『三国伝記』には版本以前の古いヴァージョンがあったことを忘れてはならない．写本で伝わる「平仮名本」では巻二一一五話にこの抜髪の小話が伝えられており，しかも版本のような複合の構成を取らず，これだけが語られ，末尾には「この事，ひゆ経にとかれたり．是をみん人，はち，おそるへきこと也．」とある．この問題については漢文資料を瞥見した後で，再説する．

4．『経律異相』巻四十四　有人為両婦所悪以至於死二十（大正53.231b27-c8.）

池上はきちんと論述していないが，この漢文資料は＜第二段＞と＜第四段＞を接続させた複合体である．現代語訳によってそれを示そう．

［231b28-c4：二婦の話］

昔ふたつの仕事をしている人がいました．その人には二人の婦人がありました．ある時若い方の婦人の方へと訪れたとき，若い婦人が言います．

「わたしって若いのに，あなたはおじいちゃんでしょ．だから一緒に住むのは楽しく

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ないわよ．おばちゃんの所へ行って住んだらどお」と言いつつその男の白髪を抜きました．

別の時に年配の婦人を訪れますと，その婦人が言います．

「わたしも年をとってきて，頭に白いものが目立つようになったわ．あなたの頭も黒いものを抜いてしまうといいわ」こうして男の黒髪を抜いて白髪頭にしました．

二人の婦人は［禿になった男を］嫌って，どちらも［男を］捨てて去りました．［男は］悲しみのうちに座りながら，死んでしまいました．

［231c4-7：二寺と犬の話（前話の過去物語？）］

過去の世にあって，［この男は二つの］寺の中間にいる犬でありました．ひとつは川の東にある寺で，もうひとつは川の西にある寺でした．揵搥が鳴るのを聞くと，食事をもらいに行ったものでした．

ある時二つの寺が同時に揵搥を鳴らしました．犬は川を泳いで渡ろうとしました．西の寺に行こうを思ったのですが，東の寺の食事の方が好いのではないかと心配になりました．東の方へ向かうことにしましたが，今度は西の寺の食事の方が好いのではないかと気になりました．こうしてぐずぐずしているうちに，水の中で溺れ死んでしまいました．

ここでも末尾に「出十巻譬喩経」と出典が明記されている．『三国伝記』の出典記述は『経律異相』の名にこれをもひっくるめて記したものだとすると，両者の相違は版本編者の加筆・改変ということになる．また「二寺と犬の話」をも含んでいるので，版本『三国伝記』の材源として『経律異相』を認定することは妥当である．なお現存する譬喩経類には抜髪の物語は見当たらないが，失われた十巻譬喩経が室町期の日本に伝わっていたという可能性は高くはないが，さりとて完全に否定することもできない[6]．ここで平仮名本の問題に立ち戻ろう．『三国伝記』の古い伝本では抜髪の物語だけを語っていた．その材源は恐らくは『経律異相』であった．出典名としては孫引きということで譬喩経名のみを挙げた．後『三国伝記』の増広作業が行われ，『経律異相』が材源であることを知っている増広の編者が改めて『経律異相』を参照し，第四段をも取り入れた．更に膨らますために別の資料から第三段をも混入させて，版本に見られる複合体ができあがったというのが実情であろう．

なお『経律異相』のこの部分は早い時期に西洋語訳が作られている[7]．

5．イソップ系寓話集

『伊曽保物語』は西洋渡来，『経律異相』は中国よりの将来ということで，我が国には同一の物語が全く異なる経路を通って流入してきた．世界文化交流史上での日本の占める位置には過小評価できないものがある．さて本話が『伊曽保物語』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

によりイソップ系に淵源するということを知った我々は西洋のイソップ伝承に眼を向けなくてはならない．諸伝本の諸話を博捜したジェイコブズの研究により，小話が古来から多数の伝本に収録されていたことを知ることができる．Joseph Jacobs, *The Fables of Aesop as first printed by William Caxton ...*, vol.I（London : David Nutt, 1889), 258. ジェイコブズの列挙したものは相当数にのぼるので，ここでは主なものを摘記するにとどめる．

5．1．ギリシア語散文

Perry, *Aesopica* No.31. Chambry 52. Halm 56. Hausrath 31[8].

このようにどこにおいても不釣り合い（ἀνώμαλον）は有害なもの（ἐπιβλαβές）である[9].

5．2．ギリシア語韻文

Babrios 22.

5．3．ラテン語韻文

Phaedrus II.2.

本話はこうした複数の古伝承に認めることが出来るので，真性イソップと認定されるものに属することが決定される．我々のより大きな関心は，我が国イソポ系の材源であると小堀桂一郎により認定されたシュタインヘーヴェル系のものであるが，確かにそこにも収録されている．

6．シュタインヘーヴェル系　Remicius 16.

Lat./Ger.　ハインリクス（Ger.ハインツ）よ，用心せよ．君は老人，半白でなく総白髪だから

Caxton　それゆえ，年を取った男には再婚など愚の骨頂である．たえず悪妻に悩まされているよりは，やもめでいるほうがずっといい．彼女は安息の時間を苦痛の時間に変えてしまうからである[10].

以下にも若干を引いた．それぞれ論ずべきことが多々あるが，別途にゆっくりと論ずべきことがらであるから，ここでは詳論は割愛の例に倣う．

7．ラ・フォンテーヌ『寓話』I.17.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

8．シチリアのディオドロス『世界史』33.7.5

Francis R. Watlton, *Diodorus of Sicily* XII（= The Loeb Classical Library 423), 22–23.

紀元前二世紀に反ローマ運動をしていたウィリアトゥスがトゥッケの住人達に右に左にと変節をするのはよくない結果になるとこの寓話を基に説いている．

9．ジャック・ド・ヴィトリ『エクセンプラ』201

Thomas Frederick Crane, *The Exempla or Illustrative Stories from the Sermones Vulgares of Jacques de Vitry*（London : The Folk Lore Society, 1890), No.201.

以上のように，哀れ船乗り達も情婦にだまされて，身ぐるみ剥がれる．

以上列挙したものは細部まで一致して同一の起源に遡り得るものである[11]．しかし流伝の経路を明らかにすることは現段階では不可能である．以下には同一ではないが，広い意味での類話と呼べるものにも眼を向けて，考察の糧にしよう．

補遺1．（清）游戯主人『（新鐫）笑林広記』巻四　形体部　抜鬚去黒[12]

ある鬚に白［いものの混じった］老人がいて，めかけにその［白い鬚］を抜かせました．めかけは白いものがとても多いのを見て，それを抜くのにたえられず，黒い方を全部抜いてしまいました．抜き終わると老人は鏡を出して自分を見ましたところ，とても驚いて，めかけを叱って言いました．

「まさか少ないのを抜かないで，却って黒いのを抜いたんじゃないだろうね」

補遺2．『百喩経』（71）為二婦故喪其両目喩　大正 4.554b5-12.

BKM，KSS に対応例はなさそうである[13]．二婦を持つ点では共通するが，失うのは髪の毛ではなく，眼であるので，直接の関係は認め難い．

補遺3．世俗文献と仏書の交渉

膨大な量を誇る仏教説話群の類話の整理については干潟龍祥の偉大な業績があるが，非仏教文献との関連は残された問題となっている．小さな一例のみを挙げれば，パーリ・ジャータカ 35 番 Vaṭṭaka-Jātaka のパラレルは多数知られるが[14]，我々はなお『異苑』巻三　鸚鵡滅〈火〉[15] を参照しなければならない．こうして非仏教文献にも仏教説話が次々と引用されてゆく事例があるので，我々は抜髪物語にも世俗文献と仏書の交渉があったと推測することは許されよう．明清時代に笑話集は大きなジャンルを構成し，それがまた日本江戸時代の膨大な噺本に影

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

響を与えたことは事実である．上の『笑林広記』所収話はやや逸れている嫌いはあるが，このジャンルのいずれかの集成本により近い形の話が収録された可能性と，それが江戸文学に取り入れられた蓋然性を，断定ではなく想定することは無益ではないだろう．

10. 総結

以上見てきたところでは寓話「抜髪男事」の流伝の系譜は，時間的にも空間的にも異常な広がりを見せている．今我々が知るところのものは，その大きな広がりの中での極く一部に過ぎないであろう．八代目文楽のマクラのタネ本は江戸の噺本に求めるのが常道であろうが，まだぴったりと合致するような所伝は見付け出されてはいない．むしろ『伊曽保物語』『三国伝記』所収のものがよく一致している．よく失われた原典というものを想定する行き方があるが，現実に存在しないものよりも，たとえ暫定的であれ実際にあるものを材源としてゆく方が健全である．ただしまだ未翻刻の膨大な噺本の中に見つかる可能性をも認めて，万一それが見いだされた場合にはそちらを材源として認定を変更する用意をも持ちつつ，当面は暫定的な同定に満足する他はない．

1）八代目亡き後最早我々はその肉声を聴くことはできないが，Victor VDR-21010 等の音源がある．筆録本としては『名人名演落語全集』9 昭和篇 4（東京：立風書房，1981），58-60.［昭和 32 年 9 月 27 日の口演の筆録］.

2）例えば，宇井無愁『落語の原話』（東京：角川，1970）は落語の材源を知る基本図書であるが，「悋気の火の玉」のヴァリエイションである「悋気の独楽」しか収録されず，マクラに振られたこの小話については言及がない．

3）『古活字本伊曽保物語 国立国会図書館所蔵本影印』（東京：勉誠社，1994），191-193.［無刊記第一種］イソップ系の文献の書誌は膨大になる．本稿では紙面の都合から時には略記して一点ずつしか記すことができないが，詳しくは次を参照．松村恒「イソップ寓話研究序説」（= Miscellanea Bibliographica V）『神戸親和女子大学研究論叢』31（1998.2），223-243.

4）われわれはこの寓話の締めの詞に眼が惹かれる．「ゆへにことわさに云ふにの君に仕かへかたしとや」下線を施した部分は諺として独立して知られる句でもある．この句は中国起源で，例えば次のものがある．「忠臣不事二君．貞女不更二夫.」『史記』巻八十二田単列伝第二十二（会注考証巨冊本 973d3-4）．この漢文成句はそのまま和文となって，国文学中に頻出する．「忠臣は二君につかへず．貞女は二夫にまみえずとも」『平家物語』九．「けんしん二君につかへず，貞女両夫にまみえずとなり」『曽我物語』五．「けんじん二君につかへず，ていぢょ両夫にまみえず」『和漢古諺』上．上の句と

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

下の句が一括して利用されているので，漢文成句が起源であることは明らかである．『伊曽保物語』の編者が上の句だけを借用したとすると，西洋の直接の原典にはそれは見られず，編者の自由な改変であると推測される．このように寓話と諺の関係は固定したものではなく，その結びつきには柔軟なものがあった．両者の関係を主題とした論文集がある．Pack Carnes（Ed.), *Proverbia in Fabula : Essays on the Relationship of the Fable and the Proverb*（= Sprichwörterforschung 10). Bern : Peter Lang, 1988. これの編者は我が国のイソップ系文献にも研究を進めたが（Pack Carnes, "“Esopo no fabulas” : More Notes on Aesop in Sixteenth-Century Japan," *Reinardus* 14（2001), 99-113)，早逝が惜しまれる．

5）池上洵一校注『三国伝記』上（＝中世の文学）（東京：三弥井書店，1976)，99-101.

6）『涅槃玄義発源機要』巻四 大正 38.38b15-25 に抜髪と犬の物語が『経律異相』とほぼ同文で伝えられている．引用の冒頭には「譬喩経第三云」とあるが，十世紀宋の智円が問題の譬喩経を閲覧できたか否かは興味あるところである．なお『経律異相』の出典などに関する労作に，坂本廣博『『経律異相』の研究――梁代の仏教文化――』（京都，2005）がある．

7）ジュリアンは仏教説話集をフランス語で編訳した．Stanislas Julien, *Les avadâanas : contes et apologues indiens inconnus jusqu'à ce jour suivis de fables, de poésies et de nouvelles chinoises*, 3 tomes. Paris : Benjamin Duprat, 1859. これは翌年に僅かなタイトルの変更を伴って最初の二巻だけが再刊されている．*Contes et apologues indiens inconnus jusqu'à ce jour suivis de fables, de poésies chinoises*（ = Bibliothèque des chemins de fer）, 2 tomes. Paris : L. Hachette et Cie, Benjamin Duprat, 1860. この訳書はラフカディオ・ハーンにより再話作成の折に活用された．ただし二刷に関わる問題がある．cf. 松村恒「富山ヘルン文庫の意義」『へるん』37（2000)，78-80．今論じている小話はいずれの刷においても tome Ⅱ, 138-139［N° CXVIII］に抜髪物語だけが収録されている．ただし仏訳の基となった原典名は記されてはいない．前後の物語にはそれぞれ出典名が与えられているので，訳者の不注意により脱落したものと思われる．シャヴァンヌの仏訳『仏教説話五百選』は有名であるが，それに先立つ予備的作業があり，そこに含まれている．こちらは抜髪・犬共に訳されている．Édouard Chavannes, "Fables et contes de l'Inde," *Actes du XIV° Congrès international des Orientalistes* I (Paris : Ernest Leroux, 1905), 87-88 [N° I]. CCC N° 462 に再録．

8）荒木英世『(CD) エクスプレス古典ギリシア語』（東京：白水社，1995；2003)，64 はこれらの伝承のうちのいずれかから採ったものであろう．

9）締めの詞のうち下線を施した部分が諺である．以下他の伝本の締めの詞をも見てゆくが，寓話と締めの詞は，編纂段階で自由に変えられる性質を持っていたことが了解されるであろう．

10）締めの詞を和訳して引いたが，もはや諺的な簡潔な表現にはなっていない．またシュタインヘーヴェル系内部でも相当に異同がある．寓話本文と締めの詞の関係の緩さがここにも見てとれる．9 節に引いた『エクセンプラ』所収話の締めの詞も自由に改変されている．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

11）『経律異相』とイソップ系の類似に気付いたのは誰が最初であろうか．ジュリアンは翻訳したので気付いていた可能性はあるが，明記しているわけではない．ジェイコブズは類話のリストの中にジュリアン訳を挙げているので，ここでは気付かれていた．ただしジェイコブズはベンファイが『パンチャタントラ』の注記でジュリアン訳とイソップ系の類似を述べた記述によっているので，ベンファイの方が早い．ベンファイの書は1859年刊行であるから，ジュリアンの一刷と同年であり，その素早い言及には舌を巻く．しかしジュリアンは出典名を記していないので，恐らくは漢文を自らは読まなかったベンファイもジェイコブズも『経律異相』ということは知り得なかったであろう．シャヴァンヌは先に述べた予備的翻訳の脚注でイソップ系寓話の対応を指摘しているので，明確に文献に基づいた両伝承の関係の指摘は，シャヴァンヌを以って鏑矢とする．

12）程世爵編『笑林広記』（北京：中華夏出版社，2001），92．鐘雷主編『笑林広記』（哈爾浜：哈爾浜出版社，2004），62-63．王利器輯録『歴代笑話集』（香港：中流出版社，1975），555．

13）Cf．松村恒「百喩経初探」『芸能文化史』24（2007），11-12．

14）『ジャータカ全集』1（東京：春秋社，1984），535が干潟対照表を補足する内容を持つ．

15）『学津討原』12（台北：新文豊，1980），354a11-15；『古今説部叢書』1（上海：上海文芸出版社，1991），二集七．これは『旧雑譬喩経』（23）大正4.515a1-10と同文のものである．これは『宣験記』にも引用されるものであり，同書にはもうひとつ類似の別伝承もある（魯迅『古小説鉤沈』下冊［＝魯迅三十年集7］［香港：新芸出版社，1967］，439-440）．共に『太平御覧』九二四，九一七に引かれている（3［京都：中文出版社，1980］，4102b，4068b）．前者は『初学記』三十（下［北京：中華書局，1962］，737）『芸文類聚』九一（下［北京：中華書局，1965］，737）にも引用されている．なお『初学記』の引用書には索引がある．白木直也「初学記所引書目稿」『広島大学文学部紀要』4（1953.12），218-232；6（1954.12），284-323．中津浜渉『初学記引書引得』（大阪，1973）．

〈キーワード〉 抜髪男事，伊曽保物語，三国伝記，経律異相，イソップ系寓話

（大妻女子大学教授）

NII-Electronic Library Service